

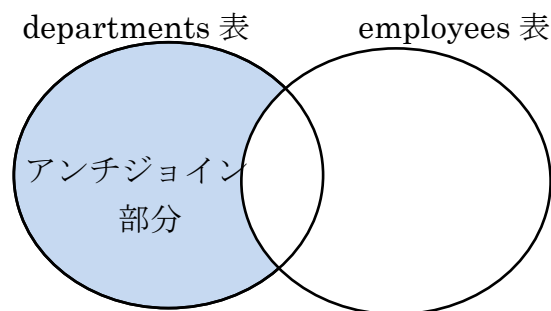
Where 条件の『≠』、『Not In』と Is Not Null の組み合わせによる検索効率の向上

【不一致条件(NOT 指定)を持った Where 句の効率的な条件指定方法】 (アンチジョイン)

NOT 条件の特徴

WHERE 句に NOT 条件を記述した場合には、通常**索引は使用されない**
ただし、IS NOT NULL 句を付けた「索引がある列」に対しては、**索引を使った検索**
が行われる

この結果、アクセス・ブロック数を大幅に減少させ、アクセスの効率化が図れる



Select 文の例

```
Select e.department_id from employees e
where e.department_id not in ( select department_id from departments )
and e.department_id Is Not Null ;
```

下線部分にアンチジョインが使われるための条件

- ・ Is Not Null 条件を付ける
もしくは、テーブル定義で列に対して、NOT NULL 制約を付ける
- ・ 該当列には、索引が作成されている

この例では、employees テーブルの department_id 列に not 条件が指定されているので、Is Not Null 条件および索引が必要になってくるのは、employees テーブルの department_id 列である

実行計画の確認

NOT 条件を記述した WHERE 句での実行計画と実行統計の比較

[A IS NOT NULL 句を付けた場合]

A ① 実行計画の確認

explain plan for 文を使って、SQL 文の実行計画を検証する

ID	OPERATION	Name
0	SELECT STATEMENT	
1	③ NESTED LOOPS ANTI	アンチジョイン結合
*2	① INDEX FAST FULL SCAN	EMP_DEPARTMENT_IXS
*3	② INDEX UNIQUE SCAN	DEPT_ID_PK

2 – filter (“E” .”DEPARTMENT_ID” IS NOT NULL)

3 – filter (“E” .”DEPARTMENT_ID” = ”DEPARTMENT_ID”)

A ② アクセス・ブロック数の確認

autotrace を使って、Select 文の実行する

69 consistent gets (アクセスしたブロック数(バッファ文+ディスク I/O 文))

B and e. department_id is not null

を付けなかった場合の実行計画とアクセス・ブロック数

[IS NOT NULL 句を付けなかった場合]

B ① 実行計画の確認

explain plan for 文を使って、SQL 文の実行計画を検証する

ID	OPERATION	Name
0	SELECT STATEMENT	
*1	③ FILTER	
2	② TABLE ACCESS FULL	EMPLOYEES
*3	① INDEX FULL SCAN	DEPT_ID_PK

1 – filter (NOT EXISTS (SELECT /*+ */ 0 FROM “DEPARTMENTS”
“DEPARTMENTS” WHERE (LNNVL (“DEPARTMENT_ID” <> : B1))

3 – filter (LNNVL (“DEPARTMENT_ID” <> : B1))

NULL 値を考慮した
NOT EXISTS 句に書
き換えられている

B ② アクセス・ブロック数の確認

autotrace を使って、Select 文の実行する

208 consistent gets